

博士学位論文審査要旨

2013年11月13日

論文題目： 国際ビジネス英語の今後の発展と可能性-BELF 時代における体系的ビジネス英語の構築に向けて-

学位申請者： 高森桃太郎

審査委員：

主査： 商学研究科 教授 亀田尚己

副査： 商学研究科 教授 上田 慧

副査： 商学研究科 教授 鈴木良始

要 旨：

本論文は、国際ビジネス英語（以下 BE と略す）の今後の発展について、文献調査と聞き取り調査を通して得た知見を基にして BE の体系化の可能性を探究しようとしたものである。その目的達成のために、(1) 国際ビジネスに使用される BE の歴史的変遷、(2) 英語母語話者と非英語母語話者が使用する BE の現状とその問題点を整理し、それらを踏まえて (3) BE の統一モデル構築の必要性を訴え、そのための必要条件を明らかにしている。本論文は、国際ビジネスコミュニケーション（以下 BC と略す）を研究対象とし、BE の実態を過去・現在・未来の観点から考察するという構成になっている。

「過去」を扱う部分では、本研究の中心的視点である BC の発展と英語との関わりを明らかにし、従来の BC の中で日本企業がどのように英語を位置付けていたのかを整理した。まず、わが国のビジネスと英語の関係は貿易と経営という領域面からみて、2つの大きな時代区分があった状況を明らかにした。次いで、日本人ビジネスマンが規範とする英語の態様が変化していった過程を考察している。BE がネイティブの英語を手本とする時代から、非母語話者のビジネス英語を発信する時代へと、パラダイムシフトしている現状につき独自の視点から考察が加えられている。

「現在」の視点からは、聞き取り調査と文献調査を通して、日本人にとってのビジネス英語モデルとは何かを探究している。調査の結果、国際的な認知度の高い BE の 1 モデルであるグロービッシュを様々なビジネス英語モデルの統一モデルとして位置付け、同モデルの問題点を詳細に分析している。

本論文では、上記のような過去と現在に基づき、BC における「未来」を「BE の体系化を究明すること」であり、将来的にはその構築と運用をめざすところにあるとしている。そこでは、効果的な統一モデルを構築するための必要条件を示し、モデル化への 1 つの考え方が提案されている。

本論文は、世界経済の主演ともいえる英米の多国籍企業がネイティブの英語から BE の使用に動き始めている事実、新しい BE 統一モデルの具体案、ビジネスの成功と BE との因果関係、などに対する考察が必ずしも十分とはいえないが、先行研究が十分に検討され、仮説に対する検証として情報収集と聞き取り調査による結果を上げている。また確かな論理構成のもと、日本企業を軸にした国際ビジネス発展のために必要とされる BE の発展に対し、独自の主張が述べられている。よって、本論文は、博士（商学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2013年11月13日

論文題目： 国際ビジネス英語の今後の発展と可能性-BELF 時代における体系的ビジネス英語の構築に向けて-

学位申請者： 高森桃太郎

審査委員：

主査： 商学研究科 教授 亀田尚己

副査： 商学研究科 教授 上田 慧

副査： 商学研究科 教授 鈴木良始

要 旨：

われわれ審査委員は、2013年11月12日午前10時から約1時間半にわたって、上記の学位申請論文についての口頭試問および総合試問を実施した。

申請者による本論文の内容の説明とわれわれ審査員各々からの試問に対する申請者の応答の内容を判断した結果、わが国を中心とした国際ビジネス英語の今後の発展と、体系的ビジネス英語の統一モデル構築に向けて提言をするという本論文の独自の意義、ならびにその主張の根拠を裏付ける申請者の専門研究分野に対する学力を確認できた。

申請者はまた当該論文に関する諸問題についての学力ならびに語学力（英語）も、欧米文献を幅広く渉猟し、それらの内容を的確に理解して、論文にも活かしていることから、その両方を十分に有していることを確認した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 国際ビジネス英語の今後の発展と可能性 ―BELF時代における体系的ビジネス英語の構築に向けて―

氏名： 高森桃太郎

要旨：

本論文は国際ビジネスコミュニケーション (以下国際 BC) における重要な共通言語であるビジネス英語について論じるものである。

近年、国際 BC において使用される英語を研究者らは Business English as a Lingua Franca =BELF (共通語としてのビジネス英語) と呼んでいる。その特徴として(1) 簡素化された英語、(2) ビジネス全般と専門に關係する特有の用語、(3) 話者の母国語の影響を受けた話法、という3点が挙げられている。

この BELF の現象面を觀察すれば、「国際ビジネスの場面で非ネイティブ (以下では特別な用語ではない限りネイティブ・スピーカーを NS、非ネイティブ・スピーカーを NNS と表記する) がこのような英語を使用している」という実態報告が可能である。場合によっては英語コミュニケーションの問題点を指摘することもできる。「ネイティブ・スピーカー問題」や、同じ言語を使用しているのに理解に齟齬が生じることなどがその一例である。「ネイティブ・スピーカー問題」とは、コミュニケーションにおいて NS が NNS に対し、言葉のレベルを調整せずに話すことを指す。言葉を発する際のスピード、熟語を含む言葉の使用など、英語コミュニケーションにまつわる様々な要素により、NNS がメッセージを理解することが阻害されるのである。

現在は NS や NNS が BELF で国際 BC を行う時代であるが、BELF の3番目の特徴から分かるように、話者はそれぞれ独自の英語を使用することが多い。実はこれが共通言語で BC を行う際にも誤解が生じる大きな理由のひとつである。全てのビジネスパーソンが同じスタイルで英語を話せば誤解は少なくなるかもしれない。しかし、現状においては一般的に合意されている「統一的なビジネス英語」というものは存在しない。それでは、実際にそのような統一的な英語を構築することは可能なのだろうか。

本稿では、ビジネスで実際に使用されている語彙のレベル、複数の企業が独自に行った英語の体系化の試みなどから、それは可能であり、かつ必要性があると主張する。そこで、本論文においては、ビジネス英語の既存のコーパスを吟味し、国際 BC の観点から批判を加え、モデルとしての国際ビジネス英語の体系化へのアプローチを示す。

第1章では主に本研究の方向性と意義を説明する。そのために、まず国際ビジネスにおける英語使用の状況について概観する。次に、国際 BC の研究において英語を取り上げることの重要性を説明する。近年では使用者の多い中国語が国際ビジネス言語として注目を集めているが、それでもなお英語が BC において中心的な役割を担っていることを説明する。

以上を踏まえ、本稿において核となる概念である国際ビジネス英語の定義を行う。この定義を行うにあたって、国際 BC 研究の分野で挙げられている三つの重要な学術的定義を見ていく。一つ目はわが国で中村定義と呼ばれている商業英語の定義である。二つ目は中村定義を踏まえた BC の定義である則定定義である。最後は、以上の定義を踏まえた国際ビジネスコミュニケーションの定義である亀田定義である。これらを元に国際ビジネス英語の定義を行い、本研究が国際 BC 研究の中に位置づけられる事を示す。その上で、国際ビジネス英語が国際 BC の重要な二つ

の領域である経営と商取引の場でどのように使用されているかを説明する。

次の第2章では日本企業とビジネス英語の関係の歴史的な変遷を見て行く。現在では多くの企業は従業員にTOEICなどの英語試験を課しており、そのスコアは企業に所属するため、もしくは昇進するための必要条件として扱われている。しかし、ある程度の英語のスキルがほぼ全ての従業員に求められるということは、かつてはなかったことである。この点を含め、企業に求められる英語力は時代とともに変化をする様子を見て行く。

また同章では日本企業における伝統的なビジネス英語の使用法が、時代の変化に伴い、NSを規範とするものではなくなったこと、そしてNNSが使用する英語の特徴を共通語としてのビジネス英語(BELF=Business English as a Lingua Franca)へと移行していることを説明する。

第3章では、実際の日中ビジネス交渉メールで使用されたBELFの事例から、国際ビジネスにおいてNNSがどのような英語を使用しているのか具体的に見る。その上で、NNSである日本人のビジネス英語を独自に概念化した4人の論者のモデルを確認し、BELF時代に日本人ビジネスパーソンに期待される英語、いわば日本人の考えるBELFがどのようなものであるかを見る。

第4章では、第3章で紹介したモデルよりもより体系的な国際ビジネス英語モデルであるグロービッシュを取り上げる。

同章ではまず、多様な英語により引き起こされるBELFコミュニケーションの問題点を紹介する。ここではNSが引き起こす問題とNNSが引き起こす問題とを分け、国際ビジネスコミュニケーションにおいては当事者がお互いに理解しやすい英語を用いるべきであるという、一見単純な主張を行う。ただ、これは思いやりという人間的側面よりも、そうする方が、ビジネスコミュニケーションが円滑に進み、時としてビジネス上の競争優位を生むという経済的側面が強いからである。ビジネスが利益を追求する営みである以上、この点は重要となってくる。この部分については、NSが使用する英語をNNSのレベルに合わせなかったがゆえに企業が損失を被ったケースや、NNSが意味をなさないビジネスメールを相手企業に送ったためにコミュニケーションそのものが成立しなかったケースを通じて説明する。

次に、上のような英語による国際コミュニケーション上の問題を解決するという期待が持たれているグロービッシュという概念を紹介する。グロービッシュはNNSの英語を、使用する語彙の面、文法の面、そして発音の面などを含めた視点から統合した具体的なモデルである。特に日本で注目を集めているが、多くの公用語を持ち、つなぎ言語を極めて重要視しているEU諸国でもよく知られている概念である。この章ではBELFとこのモデルを関連付ける。

第5章ではグロービッシュモデルを具体的に検討した上でその問題点を指摘し、批判を加える。グロービッシュはその成立においてNNSのビジネス英語を参考としている。そのため、この体系を提唱したネリエールはグロービッシュを活用すればビジネスにおいて十分なコミュニケーションを行えると主張する。本章ではこのネリエールの主張を検証する。具体的には、グロービッシュが同モデルの核として提示する1500語の語彙リストの問題点を指摘する。ここで取り上げるのは、(1)語彙選定の過程、(2)語彙の中のビジネス必須語の欠如、そして(3)語彙の解釈の問題についてである。(2)については、ビジネスコミュニケーションにおいても重要視されているビジネス交渉において、グロービッシュが十分活用できるか、ケーススタディを行う。

第6章では、前章で指摘したグロービッシュの問題点を踏まえ、それでもなおNNSの立場からの語彙を限定した体系的な国際ビジネス英語モデルが必要であるという前提に立ち、その新しいモデルをいかに基準化すれば良いか、必要条件を探り、モデル構築に必要な手順を示す。

まず、このようなモデルを作ることがそもそも必要かどうかを探るため、国際ビジネス、またはビジネス英語の領域で経験が豊富な5人の人物に、それぞれのビジネス英語への関わり方を含めたインタビュー調査を行った。その結果、5人全員から条件や程度の違いはあれ、必要性を感じるという回答を得た。そこで、ビジネスにおいては体系的な国際ビジネス英語モデルが必要であ

るという前提に立ち、論を進める。

相互理解を促進する共通言語という観点から、主に (1) 一定の平易さを保つこと (2) 基本語彙を限定すること、(3) ビジネス英語が使用される領域を区分することの 3 点を中心に論を進める。

ここでは、語彙が限定されているタイプのビジネス英語モデルで、一定の評価を受けているものを参考にする。使用するのは Globish と ESN Business 2500 (NHK テレビ「ビジネスマンのための実践! 英語でしゃべらナイト」用に作成された語彙リスト) の 2 つである。また、亀田 (2013) が提示した地域別 BELF、産業別 BELF の枠組み (便宜上亀田モデルと呼ぶ)¹を援用する。さらに、使用する英語の一般性と専門性の程度、また技術・科学、社会・文化という領域から区分を行うことの重要性を主張する。

第 7 章では本研究の総括を行い、今後の課題を述べる。

¹ Kameda, N., Future prospect of BELF: Diversion or conversion, *Doshisha Shogaku Honorable Issue in Commemoration of Prof. Shin'ichi Ota's 70 Years of Age*, Kyoto, The Association of Commerce, Doshisha University, 2013, pp.343-357.